

東イランのイスラーム陶器 -呼継された1例-

巽 善 信

19世紀の終わり頃から20世紀初め頃にかけての時期に、イスラーム陶器はヨーロッパの市場で豊富に出回り、本格的な収集が始まっている。別個体の焼き物の破片を貼り合わせて1つの容器に仕上げることを呼継と言う。イスラーム陶器の商品価値が高まったことで、呼継されることも少なくなかった。呼継自体は1つの技法であって、そこに倫理的な良いも悪いもない。どのように用いられるかである。同じような破片をつなぎ合わせて1つの容器にして観賞・使用することもあるが、イスラーム陶器の場合、偽装を目的としたものである。石膏では重さ、肌触り、叩いたときの音がまったく異なり、同じような陶器の破片を選ぶのは隠蔽のためである。展示する博物館側とすれば、偽装を取り除き、オリジナルな資料情報をいかに正確に提供できるかが課題と

なる。そのためには、呼継の内実を知る必要がある。発表者が2006年に個人の方から頂いた1例を紹介することにする。

それは9-10世紀頃に年代付けられている東イランの彩画陶器で、入手した段階ではいくつかの破片に割れていた(図1)。裏面には不透明な淡灰緑色のラッカーが塗ってあるのが一目で分かった。少し削ってみると本来の淡黄緑色した透明釉が現れてきた(図2)。口縁部に巡っていたと思われる文字文様も一部異なる破片がある。特に際だって異なる破片(図3)を取り上げ、裏面のラッカーを削って落としてみた。するとその破片外面には釉薬がかかっていないことが分かった(図4)。素地の赤褐色を呈した胎土が現れた。この破片はジグザク状に切り取ってあって、断面にはヤスリで削られた跡がある。



図1 入手段階の彩画陶器



図2 破片裏面



図3 特異な破片



図4 特異な破片裏面

しかし、上部右半分は丸くなって釉薬がかかっている、つまり口部が残っているのである。口縁部左半分は削っている。この破片とつながる破片を接合してみた（図5、6）。図6では、向かって右の大きな破片とのつながりで、この破片の口部を削ったことが分かる。位置が胴部であっても使える破片なら口縁部でも用いた、ということである。向かって左の小さな破片も別個体である。外面に釉薬がかかっているが、色は異なりやや黄色みが強い。しかも写真でも分かるように、轆轤目が水平ではなく右に傾いている。すこし傾けて接合している。また別の個所では、破片の厚みが異なるため、見込み部分の表面を合わせて、厚みの異なる分を裏面で調整している。すなわち石膏で薄く塗り、厚みを整えてから、全体に淡灰緑色のラッカーを塗っているのである。

本格的にラッカーを取り除くためにアセトンを用いた（図7）。簡単に取り除けないところは、アセトンで軟化したところを彫刻刀で気を付けて削ってみた。外面だけでなく見込み部分もラッカーで彩文が書かれていることが判明した。またなぜか陶器片を使わず、私たちが土器復元で行うように石膏で欠損部分を埋め、その上に彩色し文様を描いているところが口縁部に1箇所あった。そこは分かりやすくされていて、すぐに復元部分と分かる。復元部分があるから他の個所は大丈夫と信用させるためのものかとさえ、勘ぐってしまう。5個体以上のものをつないでいた。ただ半分以上が1個体であり、しかも底部から口縁部までつながっており、全形は把握できる。たぶん呼継で一枚の鉢に完成させられていたと思うが、現在ではそれも4分の1くらいは紛失している。

以上のことから、次のことが言える。まず第1点は、呼継に用いられる破片がすでにあらかじめ大量に揃えられていたことになる。遺跡から破片を集めていたのであろう。あらゆる陶器に対応するためには大量の陶器片が揃っていたことになる。たとえば白釉陶器なら白陶器で、厚みや湾曲具合も揃っていたことになる。良くある陶器や人気のある陶器の分類された大量の土器片が手許にあった。その為には大量の破片が手に入るイラン国内で呼継がなされたことになる。

2点目は、厚みが微妙に異なる場合は、見込みの表面を合わせて、裏面で少ない分は石膏で薄く足したり、逆に厚い場合は、ヤスリなどで削ったという



図5 接合



図6 接合した側面



図7 アセトン使用後

ことである。3点目はラッカーによる彩色、彩画である。ラッカーは彩画を描くのも全体に色づけるためにも使われている。呼継自体はいろいろな陶器の破片が揃うイランで行われたと思われるが、ラッカーによる細工は必ずしも地元ばかりとは限らない。大きな市場であったヨーロッパに持ち込まれた段階で、なされたか、やり直された可能性がある。